
悪魔な勇者

ミミナシノネコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔な勇者

【Nコード】

N4308BA

【作者名】

ミニナシノネコ

【あらすじ】

王に色々な話を省かれて魔王退治に行かされた勇者とは思えない性格の少年

「こんな勇者よくね？」

見たいなのを作りました。

たまにいい性格を見せる場面もあるんでよろしく！

目上の人には敬語を使ってください

「よくきたな勇者ミツルよ。」

「よく来たってお前がよんだんだろくずがよ！」

「はっ？」

王はミツルの無礼な態度に唾然した。

「ごほんっ、では魔王を倒して来るのだ！」

王は色々な所をはぶいてストレートにミツルに命令をした。

「いきなりだな」

「いつてくれるか？」

「しゃーねーいつてやるよ」

王はほっとした。

「では旅の軍資金として100ゴールド・・・」

「足りねーな！」

「えっ？」

「だから足りねーっていつてんだろー！！」

「なっ何をいつてるんだ！」

王はミツルの態度に目が点になった

「てめーこっちは命かけて旅にでんだよ！それをお前は100ゴールドって、ここは城だろ！まだあるだろゴールドもつとよこせ！」

「わっわかったわかったからほらもってけ」

ミツルは1500ゴールド手に入れた

「この格好で旅にでるのか・・・」

「ではいつてくるがよい」

「ちっ・・・」

「まだなにか？」

「武器は？防具は？俺の装備は？」

「わかったこれをもっていけ」

ミツルはラダートムの装備と鋼の剣を手に入れた！

ミツルは城を出て近くの森にいくことにした、すると突然

ミツルは1ポイントのダメージを受けた。

「てめーなにすんだ！」

目の前には国民的モンスター『スライム』がいた。

「喧嘩売ってんのか？」

ミッルはスライムをつかみ一言

「殺すぞ!!」

といい睨み付けた

するとスライムは泣きながら、

「ピー」（ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい）

といつた。

「わかった許す、そのかわりどれっ仲間になれ」

ミツルはそういとスライムは嬉しそうに

「ピキー（分かった仲間になるよ）」

といつた。

スライムが仲間になった！

森の奥の黒魔女（前書き）

スライムのピキーというやつがなくなっているのは気にするな☆

あと作者の好きなコビトがでるよ

森の奥の黒魔女

「復活の呪文を唱えてください」

周りには何もない真つ暗な場所に白い枠で囲まれた複数の文字が見える不思議な場所にその声は響いている。

「はっ？」

ミツルは困惑しながらも梓の文字を何個ならべた。

くわたきよはらしのずかなかはたはら

「呪文が違います」

ミツルは何度も何度も何度も文字を並べかえ続けた

「呪文が違います 呪文が違います 呪文が違います 呪文が違
ます 呪文が違います 呪文が違います 呪文が違います 呪文が
違います 呪文が違います 呪文が違います 呪文が違います 呪
文が違います 呪文が違います 呪文が違います 呪文が違います
呪文が違います 呪文が違います」

ミ「うわあああああああああああああああああああ
ああ」

ス 「どうしたの？　すごいなされ方だったよ」

夢落ちだった
ミツルはあれが夢でよかったとほっとした

ミ「なっ・・・なんでもねーよ」

ミツルは夢のことを話さなかった　あの夢を思い出すと鳥肌が立つからだ

ス「そんなことより森で何をするの？」

スライムはミツルに質問をした。

ミ「何ってその森には魔女がいて腕試しにそいつをボコろうとそして金めのモンやら使えそうなアイテムを奪ってやろうと」

ミツルは真顔で怖いこと言い放った　スライムはそれに軽く恐怖をかんじた。

そうして色々あって森に着いた。

朝にもかかわらず森の奥はまるで夜のように暗くさびしかった

ス「なんだか怖そうだよおぼけとか出たらどうするの？」

スライムは震えながらミツルに言った　その顔を見てミツルはあきれた表情でいった

ミ「モンスターがお化けを怖がってどうすんだ」

そんなことを言いながらどんどん森の奥へ進んでいくと不思議なことに森どんどん明るくなっていった

すると森の奥から何かがこっちにむかってきた。

ミ「モンスターか！なら殺す！」

ミツルはまるで獲物を見つけた腹ペコの猛獣のような悪魔が笑ったようなそんな表情をしていた。

ス「それはモンスターじゃないよ！」

スライムの叫びにミツルは元の表情にもどった。

ス「これはコビトっていう種族だよ」

そのコビトは頭に赤い色に白い斑点がついたきのこのような物をはやしていた。

そのコビトは何かを怖がっているような表情をして何かをしゃべっているようだ スライムはその言葉を理解できるようだ

ス「（森の奥で魔女にほかの仲間が食われた）って言ってるよ」

ミ「へーちょうどいいな その魔女の場所教えろ！さもないと・・・」

ミツルは悪魔のような表情で恐ろしいことをいった それを聞いてコビトはおびえているようだった

ス「怖がらせるのはやめようよ」

スライムは真顔でいったミツルの性格になれてきたようだ

ミツルとスライムはコビトに案内してもらって魔女のもとに行った
魔女「あはははどのきのこも見た目はあれだけどなかなかおいしい
ゼ☆」

その魔女は大きな白いリボンがついている大きな帽子をかぶった金
髪の女の子だった

ミ「あれが魔女か？」

ミツルはやる気をなくしたあれがミツルの想像した魔女と大きくち
がったからだ

ミ「あんな魔女が本当に恐ろしい魔女か？」

そのとき！

魔女「あんたたちなにしてんの？ んっそのきのここっちによこしな
！」

魔女はわらいながらいきなり魔法を唱えた　するとコビトの頭のき
のこがはずれた。

ス「あれ外れるんだ」

スライムはポカーンとしている

魔女「まあいいゼ☆きのこも手に入ってたしな」

魔女はそのきのこを食べながらそういった

ミ「死ね！」

ミツルが魔女に向かって悪魔が笑ったような表情で切りかかった

魔女「アブねえな！ げふっ・・・！」

魔女はいきなり倒れてしまった。それを見たスライムはこう言った。

ス「そのコビトのきのこには毒があって毒抜きしないで食べるとこ
うなるよ」

ミ「ならイマのうちこいつが持っている金めのもの奪ってずらかろ
うぜ！」

ミツルは笑いながらまるで悪役の言いそうなことをいった

ミツルは20000Gと謎の釜を手に入れた！

ミ「あはははあの王がくれた金よりいっぱいあるな」

ミツルはその場を去ろうとしたとき

ス「待って！せめて毒消し草くらい置いていってあげようよ！」

スライムは魔女のもとに毒消し草を置いていった コビトがなにか
言っている

ス「この森を抜ければ町があるって」

コビトはお礼になにかの玉をくれた

ミ「なんだこの玉まっもらっとくか！」

ミツルは森をぬけて町にむかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4308ba/>

悪魔な勇者

2012年1月12日19時53分発行